

没我的忠誠論の再検討

——『葉隠』新解釈の試み——

谷 口 眞 子

はじめに

武士道論の系譜をたどる際、山本常朝の『葉隠』が中心的書物の一つであることは誰しも認めるところであろう。「武士道」というのは死ぬことと見つけたり」の文言は広く知られており、武士道論をとりあげた著作では必ずといっていいほど言及されてきた。常朝より半世紀近く早く生まれた山鹿素行が、幕藩制秩序のもとで武士のあべき道を説いて、「士道論」を展開したのに対し、常朝は命を惜しまない戦国乱世の戦闘者の思想を主張したとして、その論は対比的に「武士道論」と呼ばれている。^①

『葉隠』武士道論の特徴とみなされてきたのは、己を捨て去って主君へ絶対的に献身する没我的忠誠・滅私奉公の考え方である。奉公に見合った御恩を求めたり、主君からの御恩に対する反対給付として奉公するのではなく、主君から冷たく扱われても行うのが「真

没我的忠誠論の再検討

の奉公」「陰の奉公」であるという言説、自らの思いを一生明かすことなく主君への片想いに徹する、いわば「忍ぶ恋」が理想の奉公の姿であるとする主張は、太平洋戦争の時期に天皇への忠誠へ読み替えられた。実は、『葉隠』は江戸時代を通じて秘書とされ、佐賀藩の藩校弘道館でも教科書に採用されておらず、筆写本が伝わっていたにすぎない。幕末には枝吉神陽が『葉隠聞書校補』の編纂を進めるが、日清・日露戦間期に書かれた新渡戸稲造『武士道』にも、『葉隠』からの引用は見あたらない。『葉隠』が刊本になって人々に読まれるようになったのは、昭和十五（一九四〇）年に和辻哲郎・古川哲史校訂の岩波文庫本が出てからのことである。安価で入手しやすく手軽に携帯できたため『葉隠』は広まったが、その過程で主君への滅私奉公を説いたものとして理解されることとなった。^②

そのため我々は、『葉隠』は主君への盲目的な臣従を主張していると考えがちである。この点について小池喜明氏は、『葉隠』思想の中核は地味で忍耐を要する「奉公人」倫理であり、『葉隠』は時

代錯誤の尚武の書ではなく、時代即応的な治世における人間知・処世知の集積であるとした。そして「奉公一篇」（奉公一筋）「家職一篇」（家職一筋）を「道」の中心的視座に置き、家臣は禁欲的・没我的忠誠をもって主君に絶対的に献身すべきだが、主君も「御家」の「奉公人」であるから、「家職」不熱心の主君へは諫言するように求めているとも指摘している⁽³⁾。

また柴田純氏は、常朝が主君と家臣の間にみられる対立を視野に入れず、主君への没我的・献身的奉公だけを主張している点に、常朝の楽天性を見だし、主君の役に立つ家臣になるために家老を目指すところに功利性をみている。そして、諫言を説いてはいるものの、同時に主君の悪行を隠蔽せよとも述べていることから、治者としての責任意識が欠如していると位置づけている⁽⁴⁾。

一方、高野信治氏は山本常朝の思想形成を分析し、常朝が仕えた二代藩主鍋島光茂以降の藩主はいずれも、国学（佐賀藩の成立事情、歴代藩主の事績、政治制度、風俗習慣など）を知らず、殉死禁止をはじめ「新儀」ばかりを行い、諫言した常朝の一門の者を切腹させたため、常朝が挫折感を味わったことに着目した。そして祖父・父が武篇者であったのに対し、常朝は幼いころ武士身分さえ否定されそうになった事情もあいまって、このような葛藤から「陰」にこもった片務的・自己抑制的奉公観をもつに至ったと考えている。さらに右のような佐賀藩の環境の中で、内気で凡庸な主君への奉公の心構えを説いた『葉隠』に、普遍的な人間哲学をみるのは問題では

ないかと疑問を投げかけている⁽⁵⁾。

右の見解に多少の相違はあれ、常朝が主君との情緒的な一体感のもと、「常住死身」になり、私的生命への執着をこえた片務的・自己抑制的奉公を主張したととらえる点では一致している。すなわち、奉公人とは主体性を持たず絶対的に主君へ奉公すべきであると説いていたとみなしているのである。

そもそも『葉隠』は、佐賀藩士で藩主の御側に仕えていた田代陣基が御役御免を言い渡された翌年、同じく御側役を長くつとめた常朝を訪れて、常朝が彼に語った話がもとになっている。つまり、御側役としていかに考え行動すべきかが説かれていたのであって、不特定多数の一般武士を想定して、武士の生き方を説いたものではない。しかも後述するように、常朝に思想的影響を与えた石田一鼎・湛然和尚はいずれも、常朝の主君光茂と確執があった人物であり、常朝も光茂から御役御免を言い渡されて不遇の時期を経験していた。常朝や陣基の履歴と家臣団における彼らの位置、当時の佐賀藩の政治状況、歴代藩主の事績などを考慮しながら『葉隠』を読むと、実は常朝の主張は、主君への盲目的服従とは逆に、凡庸な主君を統治能力を備えた主君へ作りかえるための奉公論であることがわかる。自己を抑制し、主体性を持つことなく主君へ奉公するよう求めているどころか、領土と領民を掌握する最高権力者としての藩主自身を変えることによって、間接的に鍋島家の支配を確固たるものにしたという意思がみられるのである⁽⁶⁾。本稿では、『葉隠』が己を捨て

て無条件に主君に従う没我的忠誠論を唱えたとする従来の説に対し、逆に家臣が主君を作り替えようとする家臣論の側面を持っていたことを論証したい。⁽⁷⁾

第一章 『葉隠』作成の特殊事情

第一節 山本常朝・田代陣基の履歴

まず、語り手山本神右衛門常朝の履歴をみておこう。常朝は万治二（一六五九）年、佐賀藩士山本神右衛門重澄の末子として佐賀城下で生まれた。父七十歳のときの子供で、二十歳まで生きられないだろうと言われた生来の病身であつたらしい。塩売りにでもしようかと言っていたが、九歳のとき光茂の小僧として召し使われ、十四歳で光茂の小々姓となった。その後、元服し御書物役手伝に従事したが、光茂の子綱茂の和歌の相手をしたことが光茂の不興をかって御役御免となる。常朝は佐賀郡松瀬華蔵庵で湛然和尚に仏道を学び、二十一歳で旭山常朝の法号を受けた。常朝の述懐によれば、この頃は江戸へのお供もなく気分がふさがり、湛然和尚をたびたび訪ね出家も考えたという。⁽⁸⁾この前後、石田一鼎の薫陶も受けている。二十四歳で御書物役を拝命、その後、江戸で書写物奉行、つづいて京都御用を命じられた。元禄十三（一七〇〇）年、公家の三条西実教より光茂の宿望であつた「古今伝授」を受け、重病の光茂に喜ばれる。同年光茂の死亡とともに四十二歳で出家し、佐賀城下北の黒土原の

庵室朝陽軒にこもつた。宝永四（一七〇七）年、父山本神右衛門の年譜を書き、翌年には三十六箇条からなる教訓書『愚見集』を養子権之丞に与えている。正徳五（一七一五）年、領主としての心得や修養に関する「書置」を、のちの五代藩主鍋島宗茂に差し出した。⁽⁹⁾享保四（一七一九）年、六十一歳で死亡している。

常朝は元禄十三年には、三代藩主綱茂から十石加増されて百二十五石取りとなったが、彼の一門中野家は家老や年寄役などを輩出する名門であつた。常朝の祖父、中野神右衛門清明は佐賀藩藩祖となる鍋島直茂に属し、天正十二（一五八四）年の島原半島沖田畷の戦いで、竜造寺隆信が敗死したとき、切腹しようとした直茂を諫めて退かせ、その後、文禄・慶長の役にも従軍し、武名をあげた武士である。⁽¹⁰⁾清明は直茂が死去したとき追腹を願ひ出たが、直茂の嫡子勝茂に留められた。⁽¹¹⁾その三男で山本常朝の父重澄は、山本宗春の養子となり、鍋島勝茂に従つて大坂の陣に従軍、島原の乱でも戦功をたてた人物である。⁽¹²⁾重澄は「書物見るは公家の役、中野一門は櫓の木握りて武篇する也」「組付ず、馬もまたぬ士は士にてなし」「士は喰ね共、空楊枝。内に犬の皮、外は虎の皮」（一六〇）という言葉を残すほど武篇の心意気があつた。⁽¹³⁾さらに重澄の兄茂利が継いだ中野の本家筋では、中野政利、その子利明が加判家老をつとめ、常朝の甥中野正包は年寄役をつとめ、藩政にも影響力を持っていた。

ところが、常朝は一貫して主君の身の回りの世話をする奥向きの仕事に従事していた。小僧にはじまり、小々姓、書物役手伝、書物

役、書写物奉行、京都御用と、九歳のときから、数年間御役御免で無役の状態をはさみ四十二歳で剃髪するまで、鍋島光茂個人のために働いていたのである。

また、聞き手の田代陣基も御側役であった。陣基は常朝より十九歳年下で、延宝六（一六七八）年、佐賀藩士田代小左衛門宗澄の子として生まれた。元禄九（一六九六）年、三代藩主綱茂の祐筆役となり、その後四代藩主吉茂の御側役としても仕えたが、宝永六（一七〇九）年、三十二歳のときに御役御免となり、翌年、山本常朝を訪れた。七年かけて常朝の談話を筆録し、享保元（一七一六）年に『葉隠』を脱稿する。享保十六（一七三一）年、五十四歳のとき六代藩主宗茂の祐筆役に復職し、江戸詰めで御記録役を兼ね、享保二十（一七三五）年には切米を増加された。寛延元（一七四八）年、七十一歳で死亡した。¹⁴

すなわち御役御免で失意の中にあつた田代陣基が、同じく御側御用にあたり、剃髪して隠遁生活をしていた先輩の常朝に話を聞き、奉公人としての心構え、とりわけ御側仕えの心構えを学んだ成果が『葉隠』だったのである。

しかも、常朝の思想形成に影響を与えた石田一鼎と湛然和尚はいずれも、常朝の主君光茂と確執があつた人物である。石田一鼎は寛永六（一六二九）年、佐賀藩士石田平左衛門実之の長男として誕生した。十七歳のとき家督を継いで二百五十石を拝領し、初代藩主勝茂の近侍になった。勝茂の命により、佐賀藩随一の儒学者として光

茂の御側相談役をつとめていたが、剛直不羈の性格のため、三十四歳のとき支藩小城藩主鍋島直能に預けられ、松浦郡山代郷に追放されている。寛文九（一六六九）年に赦免され佐賀郡松梅村下田に閑居した。一鼎と養子為淳による「石田私史」では、窮迫する藩の財政も顧みず遊樂にふける藩主や重臣たちを批判している。¹⁵

湛然和尚は肥前に生まれ、鍋島家菩提寺の高伝寺住職であったが、寛文九（一六六九）年、寺格昇格の件で光茂に直訴した円藏院住持村了が、死罪を言い渡され、その命乞いが聞き入れられなかったため、高伝寺を去って松瀬の通天庵に入った。光茂は再三説得したが、湛然はそれを断わり、高伝寺の末寺として建てられた華藏庵に住居し、延宝八（一六八〇）年に死亡した。常朝の父重澄は湛然を敬い生前に法号を授かるほどで、常朝も若いころ教えを受けている。¹⁶

常朝が光茂から御役御免を言い渡されて、何年も無役だった経験があるだけでなく、常朝の思想形成に影響を与えた石田一鼎は光茂から追放され、湛然和尚も光茂の方針に反対して、鍋島家菩提寺の住職の座を捨てていた。いずれも光茂と意見の対立があつたわけで、主君に異見・諫言した結果の閑居であつたと言えよう。

一方、聞き手の田代陣基は、四代藩主鍋島吉茂から御役御免を言い渡されていた。常朝自身、勘気をこうむって無役だったときに出家も考えたほどだから、陣基が置かれた立場をよく理解できただろう。常朝の話が、主君の御側に仕える奉公人として、何を指針とすべきかに多くを割いたのは当然である。だからこそ、陣基は七年も

かけて、隠遁している常朝から教えを受けたのではないかと考えられる。そして、右に述べたことは『葉隠』の構成にもよく表れているのである。

第二節 『葉隠』の構成

『葉隠』は序文、聞書一～十一から成っている。目次は次の通りである。

夜陰の閑談（序文）

聞書一 逸話や教訓（常朝の直談）

聞書二 逸話や教訓（常朝の直談）

聞書三 佐賀藩祖鍋島直茂の事績

聞書四 初代藩主勝茂の事績

聞書五 二代藩主光茂・三代藩主綱茂・二代蓮池藩主鍋島直

之・鍋島家姫君の事績

聞書六 佐賀藩歴代藩士の言行と史蹟伝説

聞書七～九 佐賀藩歴代藩士の言行と評判（御国諸士の褒貶）

聞書十 他藩の武士の言行ほか

聞書十一 教訓と補遺

聞書一・二は常朝の直談を陣基が書きとめ、それを共同で編集したのに対し、聞書三～聞書十一までは陣基が他の諸書や他者の聞書をもとめて、単独で編集したと考えられている。聞書一・二の背景となった事件や逸話の具体的内容は、聞書三以降に記されており、

当時の習俗や藩士の言行への論評などが書かれている。遺恨の火種になるとして刊行されず秘書として写本で伝わったのは、このあたりにも原因があると思われる。聞書三以降が、藩祖及び歴代藩主や藩士の事績・逸話にあてられているのは、陣基が書物を調べ人から話を聞いて、常朝から勧められた国学を勉強した結果だろう。『葉隠』は不特定多数の家臣に向けた一般的武士道論ではなく、常朝が御側役を基本に作り上げた奉公人道と、佐賀藩士として知っておくべき国学とをまとめたものであった。

下級の御側役は、禄高が少なく家臣団での地位も高くないが、主君と日々接しており、主君を変ええる影響力があった。しかし一方で、勘気をこうむる可能性が高い役職でもあった。奉行職の家臣のように、政策を提言したり実施したりする実務的なことができないからこそ、御側の者は主君の側にいるという特性をどのように活かせるか、と常朝は考えたのである。

第二章 常朝の藩政認識と「一人被官」としての

アイデンティティ

第一節 歴代藩主の事績に対する常朝の認識

佐賀藩は肥前国の六郡一円ほかを領する外様大藩である。慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の戦いでは鍋島直茂の嫡子勝茂は西軍に属していた。ところが西軍が敗れたため、黒田長政らを介して家康に

わびを入れ、立花宗茂を討って何とか領国を維持した。慶長十八（一六一三）年、幕府は肥前国三十五万七千石を安堵した。勝茂は小城・蓮池・鹿島の三支藩をもうけ、竜造寺四家を懐柔し、島原・天草一揆の折には原城総攻撃に参加し、軍功をあげている。常朝は『葉隠』冒頭の「夜陰の閑談」で、藩祖直茂がもり立てた鍋島家が続くようにと初代藩主勝茂が苦勞し、軍法を代替わり時に口頭で伝授し、家中の仕置きや国内統治の制度、公儀向きに至るまでのさまざまな法を「鳥の子帳」に集大成してまとめ、御家の長久をもたらしたとして、その統治能力を高く評価している。そして、家職勤めの手本は直茂・勝茂時代にあるとする。常朝によれば、上からは御用に立つ者を捜し、下からは御用に立とうとし、上下の思いがつかっていたので、主君と家臣の主従関係が円滑で、御家がしっかりまとまっていたというのである。

ところが、二代藩主光茂、三代藩主綱茂、四代藩主吉茂の時代になると、「新儀」が行われるようになった。相伝の書物によっても直茂・勝茂の苦勞を知るべきなのに、以後の藩主は甘やかされて育ったために、国学を学ばず好き放題の振る舞いをしているというのが、佐賀藩確立期の藩政に対する常朝の評価であった。

常朝は主君光茂が行ったいくつかの政策に反対している。まず明暦四（一六五八）年に実施した世祿制―家臣が死去した後継者が幼少の場合、知行切米を減らしていたのをやめ、親と同じ知行高を支給する制度―である。¹⁷ 罪もないのに知行切米を減らされれば、積極

的に奉公する意欲がなくなるとの理由であったが、常朝は逆に、奉公の実績もないのにそのまま家祿が継げるのであれば、相続したあと奉公に励まないと批判している。

寛文元（一六六〇）年、光茂が幕府や他藩に先がけて殉死を禁止したことにについても、常朝は「余り御慈悲過ぎ候て、奉公人の為にならず候」と反対している（二―一二）。元禄十三（二七〇〇）年に光茂が死去した際、常朝は追腹を切れなかったため剃髪を余儀なくされた。もっとも、常朝は出家によって「常住死身」である自分の存在を他の家臣や他藩に知らしめ、主君の名をあげるのに貢献したと陣基に述べているから、殉死が禁止された環境のもとで、家臣として最善の行動を取ったと自負していたことがわかる。

また天和元（一六八二）年、参勤交代のお供に小々姓を連れて行くのを停止したことについて常朝は、飲食・雑談に明け暮れ、言葉や身だしなみに気も配らず暇をもてあましている奉公人が増えていることを憂慮し、小姓は幼少から諸役を見習い御用に立つ者だから、もう一度小々姓を仰せつけるべきであるとして反対している（二―一二）。

以上のことからわかるように、常朝は主君光茂が行ったさまざまな政策、とくに世祿制と殉死禁止に関して、藩士たちがどのような制度的枠組みの中に置かれれば奉公しようとするか、という観点から批判していると言えよう。

第二節 四誓願と奉公人としての自負

彼は御家を一人で担うという「一人被官」の気持ちで日々を過ごし、奉公人としてのアイデンティティを確立していった。『葉隠』の序文には、常朝が毎朝神仏に願った四項目の誓いが書かれている。すなわち、①「於武道おくれ取申敷事」、②「主君の御用に可立事」、③「親に孝行可仕事」、④「大慈悲をおこし、人の為に可成候事」である。①③は石田一鼎が寛文十二（一六七二）年に著した『要鑑抄』にみえる三ヶ条の誓願（「武士道に於て未練を取るべからず」「先祖の名字を断絶すべからず」「畢竟主君の御用に立つべし」）によっており、④は「武士は勇気を表にして内心には腹の破る、ほど大慈悲心を持たざれば、家業は立たざるなり」という湛然和尚の論しによる。^⑱ 四誓願を毎朝仏神に念じる日常を送り、事に臨んで胸に四誓願を押し当てて私心を捨て工夫すれば、自分が進むべき道がはっきりすると常朝は述べている。武勇・忠義・孝行・慈悲は常朝がもつとも重要視している徳目であった（序文及び一―四）。これらの徳目のうち、常朝は自らの行動の中で武勇や忠義をいかに体現していたのだろうか。まず武勇については、人生で二度、切腹の介錯に成功したことを自慢している。「山本神右衛門常朝年譜」^⑲には、天和二（一六八二）年十一月十一日、いとこの沢辺平左衛門の介錯をしたときの様子が述べられている。それによれば、常朝は平左衛門から切腹前夜に介錯を頼まれた。平左衛門は沢辺一門へ介錯を頼んだが、引き受け手がなかったという。介錯を滞りなく

果たした御礼として、沢辺家からは名高い鎧が贈られた。翌日、常朝は親類の山本五郎左衛門から、介錯は成功しても高名にならず、失敗すれば一代の恥になるものだが、このたびの介錯は評判がよく大慶至極であると言われ、紋付きの鞍鎧を贈られている。介錯は一刀両断に首を打ち落とさなければいけないため失敗が許されない。地味ではあるが、普段から剣術の稽古が必要とされる役目であり、常朝は介錯を無事果たせたことを一生の誉れと思っているのである。今一度は、元禄二（一六八九）年九月二十六日、甥の中野将監正包が切腹したときの介錯である。ただし先の「年譜」には、このことについては略す、とあり詳しい説明がない。後述するように、正包は主君に諫言したのにそれが受け入れられず、切腹を仰せつけられた。常朝は正包の勇氣ある行動に敬意を表しながら、一日も早くその正しさを人々に認めてもらいたいと考えていたため、説明を省略したと考えられる。

次に忠義について考えてみよう。常朝は『愚見集』の「忠孝」の節で、忠孝は別々の事柄ではなく「主に忠節を尽すが則ち親に孝行なり」という見解を述べている。そして「公に奉る」、すなわち身命を主君に捧げることが奉公だと考えていた。^⑳ 奉公に対する常朝の思いが尋常でなかった様子は、常朝が「御家一大事出来候時には、進出、一人も先にはやるまじきものとぞと、存出候へば、いつにても落涙申候。今は何事も不入、死人同前と思ひて万事捨果候へども、此一事は若年の時分より骨髓に通ひ思ひ込申候故か、何と可忘と思

ひても不任心、天晴我等一人ならではなきとのみ存候」と述べ、涙があふれ声が震えてしばらく話もできないほどだったところを、陣基が何度も見ていることからもうかがえる（二一七八）。

常朝がこのように奉公への思いを固めた背景には、御役御免になつていたころ薫陶を受けた石田一鼎から、「その方は末頼もしい力量がある。自分の死後、御家を頼む。大儀ながら御国をになつてくれ」と涙を流して言われたことが影響しているらしい。この一言が胸にこたえて今も忘れられないと述懐している（二一一二三）。

常朝は九歳から小僧として光茂に仕えて以来、光茂の死去まで三十年近く御側御用をつとめた。大坂で夜着や布団を拝領したときも、光茂から「慰み方に召し使われている者たちは加増とは縁遠いので、気持ちのしるしまでに与えるが、年寄役へ礼をするには及ばない」と言われて、「昔ならこの布団を敷き夜着を着て追腹するものを」と思ったという（二一六四）。また、医者から朝鮮人参を飲むように勧められたとき、「常朝のための人参は主君用の分から渡すので遠慮しないように。主君の御用のために奔走している人なのだから」と言われて嬉しかったようである（二一二六）。主君の一言や主君のために頑張っていることを認めてもらうことが、常朝にとっては何よりもありがたかったのである。

しかし、常朝の大手柄は何といつても、重体の光茂に「古今伝授」を授かってきたこと、そして光茂死去の際に剃髪したことであった。元禄十三（一七〇〇）年、京都にいた常朝が三条西実教か

ら受け取った古今集の切紙伝授の箱を持って国元に帰ったときには、もう光茂は子供・親類・家老たちへの暇乞いや遺言もすませていた。届けた切紙伝授の箱を光茂がみたのは五月一日のことである。その後、常朝は三条から預かった言上書二通を差し上げ、光茂は十六日に逝去した。父の勝茂から叱責されるほど無類の和歌好きだった光茂にとって、古今伝授はこの上ない冥土のみやげであった。常朝が「御存生の内、持ち下り 御目に掛け奉り候儀、彼是生前本望此上なき御事候⁽²¹⁾」と喜んだのも無理はない。

さらに光茂死去の際に常朝は剃髪して、武士としての面目をほどこした。そのことについて、「大身・小身、智恵や芸のある人であつても、主人のために命を捨てる段になると怖じ気づき、かねてから一命を捨てて主君と一味同心していた自分だけが、出家する所存を申し出た。他の者は自分を見習つてあとからした。日頃、大言壮語していた身分家柄の高い歴々の衆が、主君が死んだとたん後ろ向きになった」と述べ、自分一人が主君の名誉を保つたと自負している（二一九九）。

常朝の奉公人としてのアイデンティティは、「一人被官」の一念で己を捨て主君に奉公したことにあつたが、そこには譜代の御国者としての自負も加わっていた。「新規に抱えられた者は器量を示し、お役に立って名をあげ、子孫のためになることをするが、譜代の者は主君の落ち度を我が身に引き受け、主君のためになることを思う」（二一一〇一）として、譜代と新規取り立ての家臣の間に決定

的な違いをみている。この論理に従えば、私欲を捨ててひたすら主君に尽くせるのは、先祖代々鍋島家の家臣であった譜代の者だけである。新規召し抱えの者はまず自己の家の基盤を作らなければならぬから、このような形で主君に奉公することはできない。常朝は、「名誉ある鍋島家の家来として生まれ、先祖代々厚恩をこうむっていることを認識し、心身をなげうちひたむきに主君を思う志があれば、不調法の者でも主君から信頼される被官になる」(一一三)としているが、これを聞いて陣基は勇気づけられたことだろう。譜代だからこそ、御役御免になって不遇の扱いを受けても、先祖代々受けた御恩ゆえに我慢し、主君のためになる被官を目指さねばならないというわけである。⁽²⁾

こうして、常朝は光茂との主従関係を述懐し、奉公人としての心構え・心意気を陣基に伝えたのである。

第三章 没我的忠誠論の再検討

第一節 武勇と奉公人道

常朝が歴任した書物役や書写物奉行などは、「書物見るは公家の役」と語った常朝の父からすれば、武家の役とは言えない職務だったかもしれないが、常朝に武篇の心得がなかったわけではない。武勇は先にあげた四誓願の冒頭にかかげられており、「聞書一」の第一条にも「武士たる者は、武道を心懸べき事、不珍といへども皆人

油断と見へたり」とみえる。また「一門・同組に介錯や捕り物など武士道にかかわることがあるとき、自分に続く者はいないと普段から覚悟していれば、いざというとき立派にやつてのけて人の目にとまるものだ。常に武勇の人を乗り越えようと心がけ、誰々には劣るまいと思つて勇気を身につけること」(一一一六)とも述べている。常朝は奉公人としての武士は、戦時であつても平時であつても武篇の心得を持つていなくてはならないと考えており、武士が後れを取ることに恥辱とその影響力を十分認識していた。

ただし、武芸に執着し一芸に秀でること出世するのは、「芸者」であつて武士ではないというのが常朝の考えであつた。「他藩では『芸は身を助ける』というが、鍋島家では『芸は身を亡す』という。一芸ある者は芸者であつてさむらいではない。『某はさむらいである』と言われるように心がけるべきである」(一一八八)というのだが、では武士・さむらいとはどのような者を指すのか。武芸・芸能は一通り身につけているが、日頃から言動や態度にも臆病なところをみせず、いざというときのために常に武篇の心構えを持つて死の覚悟をしている者、これが常朝のいう武士・さむらいであつた。

それでは、日常的に武勇にかかわる心構えをいかに育てればよいのか。「これは折節の振る舞いや物言いに表れる。とりわけ一言は大切である」(一一一八)として、常朝は日常の振る舞いや言葉の働きに注目している。そして「臆病」「逃げる」「恐ろしい」「痛

い」などという言葉を、戯れにも寝言にも言うべきではないと戒め（二一一一七）、その理由は心ある人がこのような言葉から、心底をおしはかるからだとしている。そして武士の子弟教育に関しては、勇気を育て臆病にならないように気をつけ、言葉遣いや礼儀を身につけさせるよう勧めている（二一八五）。

戦争こそないものの、近世の武士は常に大小を携帯し、暴力を鎮圧して武士としての名誉を守らなければならなかった。したがって武士道にかかわる場で後れを取ることは、暴力を鎮圧すべき武士として行動できないことは、本人のみならず一門・親類の恥となった。

常朝は「幕府向きのこととはし損じても、不手際とか馴れていないからなどと言えるが、思いがけない事件が起きた場にいあわせて後れを取った者は、言い訳できない」として、次のように述べている。

若、無念也とおもわば、武運に尽、即座の働をせず、悪名となるからは、身の置所なし。中々、生て恥をさらし、胸を焦すべきよりは、腹を切たらば、責て成べし。是も命が惜くて、「むだ死」などいひて、生る方の分別仕かへ、今から先、五年か十年・廿年の間、生て後指さ、れ、恥を晒してみても、死失骸の上に辱をぬり付、子々孫々咎も無き者も、縁により生来り恥を受、先祖の名をくだし、一門親類にも疵を付、無念千万の事に候。偏に日來の心懸なく、武士とは何としたるものやら、夢にも不存、うか／＼と日を暮し罰と云物成べし。（二一九四）

とりわけ喧嘩・口論への対処は、一歩まちがえると切腹や改易を命じられかねない事件だった。自己の名誉を失わない形で、言葉の働きやとっさの機転により武士としてふさわしい行動をとること、これが求められていたのである。ただし殿中では刃傷を我慢し、無駄な争いは避けるべきであるという考え方も存在した。それは、主君にとって大切な家臣を無駄死にさせてはならないということから来ていた。

また仲裁方法については、大根売りの話を引き合いに出して説明している。「橋の上で奴が出合い、互いによけず討ち果たそうとするところを、大根売りが中に入り、天秤棒の先に双方をとりつかせ、前後を取り替えて通すようなものである」というのである（二二二四）。ただし無礼な言葉に対しては、それ相應の返答をすべきであるとも言っている。言われて黙ったままでは、腰抜け・臆病者と思われ、武士の名誉にかかわるからである。「馬鹿者」には「たわけ者」、「磔道具」には「火あぶり道具」と言い返し、気の利いた当座の一言によって名誉が守れるよう心がけるべきだとしている。

常朝にとって理想的な奉公人とは、主君の御用に立ちたいという思いだけを心に抱き、身命をささげて奉公し、自慢を捨て私欲を捨て、自らの行動・言動の意味や武士社会からの評価を自己判断し、藩主を頂点とした佐賀藩鍋島家による統治に貢献する覚悟をもつ者であった。外面的には身なり・口上・手跡にすぐれ、内面的には武

勇の心意気が高く、常に今の一念がすべてであるとして気を抜くことがなく、非常事態に直面しても即座に適切な行動がとれる者を、理想としたのである。

それは、「我が身を主君へ奉り、すみやかに死にきつて四六時中主君のことを思い、事を整えて上申し、御国を固めるところに目を付けなければ奉公人とは言えない。この心がけに身分の上下の区別はない」(一一三五)、「分別・芸能・大身・富貴・器量・発明、このうちどれか一つの取り柄を自慢してすむと思うから、一生を無駄にしてしまう。奉公の志とは、奉公人としてふさわしく自慢を捨て自らの非を知り、どうすればよいかと探求し、その途中で死ぬことである」(一二一二)などの言葉に表れている。²³⁾

したがって純一無雑な心、忠孝・武勇・大慈悲を内に秘めた一念を常にもち、いざという時と今を別に考えず、身なり・口上・手跡の修行を怠らず、絶えず言葉に気を配り、普段から家来を大切に扱うことを求めた。常朝は養子の権之丞へ「只今がその時、その時が只今である。奉公人となったからには、主君の御前でも家老の前でも幕府の城でも將軍の御前でも、すらすらと話せるように普段から稽古しておくこと。万事、これに準じてやること。鎧を突くのも公儀を勤めるのも同じである」(二一四八)と言っている。いかなる時でも奉公人としての覚悟を失わない修行をしていれば、その精神的な高さが外面に現れ、物静かで言葉が少ないが、礼儀正しく眼光鋭い威厳を醸し出すというのである(二一九〇)。

第二節 家臣としての主体性と主従関係

ここまでみてきた常朝の奉公観をみれば、彼がいう「私を捨てる」とは、「私欲を捨てる」「我意に固執しない」とほぼ同義であって、自己の主体性を捨てるという意味で使われているのではないことは明らかだろう。むしろ逆に、制度化された主従関係、言い換えれば親が死亡・隠居すれば子供が家督を継ぐのが当然といった、大名家と家臣の家との関係の中で、失われた主体性を取り戻し、自らの意思で奉公するよう主張しているのである。自分の狭い了見にとらわれず、周囲の智慧を借りながら判断する力を持つこと、自己の名声や利欲のためではなく、ひたすら主君のため、家臣・領民のためという利他意識にもとづいて行動すること、とりわけ主君に諫言すること、これが常朝が強調した点であった。

常朝は主従関係について、「主君の有り様には構わず、常に御恩のかたじけなさを骨髓に徹し、『忍ぶ恋』に似て、たまに会うときは命を捨ててもよいと感じるほど思い死にする深い心入れ」と述べている(二一六二)。このような言説から、常朝が主君に対し、世界にあなたも二人だけしかないような「恋愛感情」を抱いていたと考える向きもあろう。しかし、常朝が盲目的服従を求めていたのではないことは、事によっては主君の命令に従えない時があるとして、奥方付きの家臣が奥方の死去に際し、殿の御意に従って剃髪しなかった例を批判していることから知られる(二一一三六)。

しかも常朝は意外に主君を客観的にみている。若いころからの教育が大切であるとして、国学の勉強の重要性を強調し、主君の心入りを直して誤りがないようにするのが、「大忠節」であると述べ（二一五二）、主君の性格にあわせて人間関係を築くよう勧めているのである。

内気によりき成御主人様は、随分はめ候て、御用落どなき様に、調て上げ申答也。御気をそだて申所也。扱又、御気勝、御発明

成御主人は、些御心被置候様にしかけ、「此事を彼者承り候て何とか可存」と被思召候者に成候事、大忠節也。ケ様の者一人も無之時は、御家中御見こなし、皆手もみと被思召時は、御高慢出来申候。（中略）疎まれては、忠を竭^{つくす}事不叶。爰が大事也。大かたの人の見付ぬ所也。其後に、少宛ずめかせ申て置迄也。

（二一一二）

（内気で凡庸な主君であれば、誉めて落ち度がないようにしてあげること。精神を育てることである。逆に勝ち気で利発な主君には一目置かれるようにしかけ、「これについてあの者なら何と考えるだろうか」と思われるぐらいになるのが大忠節である。この種の家臣がいらないと主君は家中を軽蔑し、顔色をうかがうだけの腰抜け共と思って高慢になる。（中略）主君に疎まれては忠義を尽くせない。ここが肝要である。大方の人が目を付けないところである。あとで少しずつ主君に気づかせるまでである。）

第三節 主君への諫言

常朝は「奉公人の究極は家老になって主君へ異見を申し上げることだ」（二一一四〇）と主張する。家老の地位を望むのは、家臣団の頂点に立つて権勢をふるうためではなく、主君に異見をしてあるべき方向へ藩政を動かすためである。家老への立身は私欲のためではなく、あくまでも主君へ諫言できる資格を得るための方策と考えられていた。

常朝は、しかるべき立場にない人物が諫言するのは不忠であるから、諫言するのにふさわしい地位にある人へ相談し、その人の見解として伝えてもらうのが忠臣であると考えており（二一四三二）、主君へ進言するときのかけはしになるように、日頃から主君の側近くに仕える出頭人と親しくするよう勧めている（二一五〇）。権力者に対する追従ではなく、御家を背負うという志にもとづき、人間関係をうまく利用するよう忠告しているのである（二一一二三）。

主君に限らず人の欠点を指摘しそれを直すのは難しい。相手の氣質・人間関係・タイミングを考慮し、恥をかかせず自然に納得させることの大切さを、常朝は強調している。あたかも「のどが渴いて水を飲むように、納得させて欠点をなおすのが異見である」（二一四一）というのである。「趣味の話などから親しくなり、自分の欠点を言って直してもらうように頼むと、相手も、自分もお願いしやす」ということで、お互いに直しましょうということになる」（二一

一三〇）など、狭い武士社会で摩擦を起こすことなく、円滑な人間関係を作る方法を考えていることがわかる。

常朝が推めるのは、世間に露顯しないようにしながら、本人に気づかせて悪事や欠点を直していく方法である。これが主君への諫言になると、「誠意ある諫言はほかに知れないようにするものだ。ご機嫌を損なわないようにして癖を直すのである。広言するのは主君の非をあばき、自分の忠義をことあげし威勢を張る行為である。おそらく他国者にあることだ」（一一一〇）ということになる。先に述べた御国者に対する常朝の考え方からすれば、自分の忠義立てを強調することによって地盤を確立しなければならない召し抱え者・他国者とはちがって、御国者は代々の主従関係が安定しているがゆえに、その種のパフォーマンスは必要ないというわけである。中野一門で加判家老の中野政利は、おおつびらに異見を言うのではなく、ひそかに言上したため主君が受け入れたという。常朝は、理詰めで諫言するのは、主君の悪名を露顯させる大不忠であるとしている。

しかし、主君が諫言を受け入れるのはたやすくはない。常朝に思想的影響を与えた石田一鼎と湛然和尚は、ともに光茂と意見があわず、追放されたり住職の座を捨てたりした。主君への諫言は、自分の命を危険にさらす行動だった。実際、常朝の甥の中野正包は諫言して切腹を言い渡されている。にもかかわらず、常朝が諫言を勧めるのはなぜか。それは、主君をただすことによって藩政を動かすという

堅い意思があるからである。

では、主君が諫言を受け入れる方向へもっていくにはどうすべきか。それは主君と心を通わせた状態を作った上で、命を懸けて誠意ある諫言をひそかに行うという方法であった。

大人は我がまゝに育立て、曲^{くま}有に定りたる者也。大抵の曲にては、国を失ふ程の事はなし。多分仕直すとして、どしめき候時、世上に洩聞へ、国を失ふ事有。（中略）大形諫言と申候には、佞臣の我手柄立か、又後見など有てする事也。忠義の諫言と申は、能御請被成筋を以、潜に申上るもの也。若御請不被成時は、弥隠し候て、我身は弥御味方に成て、御名の不立様に仕もの候。多分腕立に成たがり、御請不被成時、後向申が多く候。どしめき廻りては、不忠の至極に候也。（二一一四）

（光茂はわがままに育つて癖がある。大抵の癖では国を失うことはない。それを直そうとして騒ぎ立てると、世間に漏れ聞こえて国を失うことになる。（中略）だいたい諫言は、佞臣が手柄を立てようとするか、後見があつてすることである。忠義の諫言というのは、主君が受け入れられる筋をもつてひそかに申し上げることである。受け入れてもらえないときは主君の非を隠し、主君の味方になって主君の名がでないようにすることだ。己の力量を頼み、才にまかせて事を為し遂げようと気負う者は、受け入れられないとなると途端に後ろ向きになる。騒ぎ立てるのは不忠の極みだ。）

常朝は光茂の性格を客観的にみている。わがままに育つて癖がある主君をうまく扱うのがいかに難しいか、苦勞した様子があるがえる。先にふれた中野正包は「諫という言葉にはすでに、『私』が含まれている」と言っていたらしい。「諫める」は「誤りやよくない点を改めるように忠告する」意味だから、そこには「私が別人格の主君に対して」というニュアンスが入っている。主君と一心同体であれば、「私」をことさらひけらかすこともないし、主君は異見を受け入れるはずだ。常朝はそう考えていたと思われる。

おわりに

『葉隠』は「忠の不忠の、義の不義の、あてがいの不あてがいの、などと理非邪正に心がつくのはいやである。無条件に奉公が好きで、ひたすら主君を大切に思えばそれですむ（中略）わずかの一生だから、ただ無二無三がよい。すべてのことを捨てて奉公三昧になるのだ。忠義をことあげする理屈がいやである」（一一一九五）と述べている。しかしこれは、自己の生命を軽んじ、後先を考えず猪突猛進することを勧めているのではない。生死の選択には武士としての名誉がかかっているが、日頃から大事に対処する覚悟を持っていないと、その場で分別を働かせて考えても心は動揺してしまう。普段から奉公人としての指針をしっかりと持ち、言動に気をつけて浩然

の気を養い、御用に立つという一念で奉公に邁進するよう忠告しているのである。

常朝は、主君をひたすら思い御用に立つことだけを思つて奉公に専念していれば、やがてその誠実さが認められると考えていた。彼が奉公三昧の境地に達しなければならぬと主張した背景には、長生きできないと言われた体であったこと、湛然和尚に学び法号を受けるほど仏道に帰依したこと、武勇に長けた中野一門として、常に死を覚悟しているべきであると教えられてきたことなどが考えられよう。

常朝は奉公の究極は家老になつて主君へ諫言することだが、家老になれない場合は、しかるべき人物に代わりに諫言してもらうよう頼むことが、家臣として重要な奉公であると主張していた。そして理不尽な主君が切腹や浪人を言い渡すとしても、それを覚悟して諫言すべきと考えていた。ただし、主君への諫言は自己の能力のアップルではないから、秘密裏に行い、主君の悪行が直らないときには主君の悪を隠さねばならないとしている。

常朝のような役儀についている者は、組頭や物頭のように騎馬隊や足輕隊を統率するわけでもなく、奉行のように特定の業務があつて、藩政に寄与できるわけでもない。藩主の身の回りの世話をし、個人的な要望に応えることが任務である。しかしその枠内で、藩主のご機嫌をうかがいつつ、帝王学的一端を担当する心構えをもつて御側仕えに徹する。これが陣基に伝えたかったことだったと考えら

れる。すなわち、常に藩主に接していることを利用して、藩政の要である主君に影響を与えることができるというのである。言い換えれば、家臣の諫言を受け容れ、政治運営ができる器量を持った人格へ主君を導くようにすること、これが常朝の説く究極の奉公人道であった。

当時の幕府や藩は、主君個人への忠誠ではなく、領民・領地を統治する機関としての將軍家や大名家に対して、家臣を奉公させようとしていた。その一例が殉死の禁止である。幕府が公式に殉死を禁止したのは寛文三（一六六三）年だが、佐賀藩ではすでに寛文元（一六六二）年、光茂が殉死禁令を出していた。あの世まで主君のお供をする、という発想を否定し、「御家」の構成員として藩士を作りかえようとしていたのである。

その意味では、濃厚な主従関係を求める常朝の主張は時代遅れ、あるいは時代錯誤の言説と解釈されるかもしれない。しかし彼の奉公三昧の主張は、武士としての主体性を確立し、主君の誤りを正そうとする意図にもとづいている。藩主は領民・領地に対して全権を握る人物であり、大名家の統治責任者であるが、その責務を果たさなければ、幕府によって御家を取りつぶされる可能性がある。常朝は主君が国学を学び、諫言を聞くだけの器量をそなえた人物になるよう誘導する責任は、家臣にあると考えていた。かつて岡山藩主池田光政は、家臣を時代に即応した奉公人に作り替えることに腐心した⁽²⁴⁾。常朝は逆に、家臣が武士としての主体性を保持しつつ、主君を

作り替えることによって、藩政と御家の安定がもたらされると主張したのである。

注

- (1) 相良亨『武士の思想』（ベリかん社、一九八四年）、菅野覚明『武士道の逆襲』（講談社、二〇〇四年）など。
- (2) 宇野田尚哉『武士道論の成立―西洋と東洋のあいだ』（『江戸の思想』第七号（一九九七年））。なお、昭和十六（一九四二）年に佐賀県中等教育会は「男女中等学校生徒をして日夜親炙せしめ、遍く皇国民錬成の精神的教書たらしむべく」、「『葉隠』を抄出した『葉隠抄』（富山房発行）を編纂している。序文では「其の神髄は今日の国家本意の理想を顕現するものにして天皇中心主義に帰趨するものに外ならず其の説く所滅私奉公庶民一和実行主義の教条たらざるなく」と述べている。
- (3) 小池喜明『葉隠 武士と「奉公」』（講談社、二〇〇二年）。
- (4) 柴田純『江戸武士の日常生活―素顔・行動・精神』（講談社、二〇〇〇年）。
- (5) 高野信治『「葉隠」に関する一考察―その思想形成の諸契機をめぐって―』（『九州文化史研究所紀要』第四〇号、一九九六年）、同『鍋島光茂像の一側面―「葉隠」にみる批判的眼差しをめぐって―』（『葉隠研究』第四三号、二〇〇一年）。
- (6) 本藩の藩主光茂と、その叔父の小城・蓮池・鹿島の三支藩主との間には深刻な抗争が起きていた。天和三（一六八三）年、本―支藩体制が確立するが、元禄・宝永期には再び摩擦が生じており、享保十七・八年には藩主宗茂の江戸参勤中に、小城・蓮池両支藩主と親類や竜造寺氏系の有力者が宗茂龍臣の罷免を強行している。丸山雍成『「葉隠」武士道とその周辺』（『葉隠研究』第三十二号、一九九七年）。常朝が鍋島本家への忠誠を強調したのは、このような政治的背景があると考えられる。

- (7) 『葉隠』をめぐってはさまざまな解釈がみられる。たとえば奈良本辰也 訳編『葉隠』（角川書店、一九七八年）や三島由紀夫『葉隠入門』（新潮社、一九八三年）などの論考は、『葉隠』を宗教や道徳を超えたところにある人間の美学を説いたものと位置づけ、一朝有事の際の心得に「死の覚悟」を見いだし、その境地に至るための平素の修養―行水、爪切り、髪結いなどの美的生活―に武士道の美しさをみだしている。また山本博文『男の嫉妬―武士道の論理と心理』（筑摩書房、二〇〇五年）は、常朝は小姓として主君の側に仕えていたため、我が身を捨てて行動した他の武士に対する嫉妬心を持つに至ったとしている。

- (8) 『葉隠』聞書二一四一。なお以下の箇条番号は『三河物語・葉隠』（日本思想大系二六）（岩波書店、一九七四年）による。

- (9) 「山本神右衛門常朝年譜」『佐賀県近世史料』第八編第一卷（佐賀県立図書館、二〇〇五年）。

- (10) 「中野神右衛門清明年譜」前掲『佐賀県近世史料』第八編第一卷。

- (11) 「直茂公御逝去之硯、中野神右衛門追腹可仕与□勝茂公江言上被差留候御自筆之御書写等三」『佐賀県近世史料』第八編第二卷（佐賀県立図書館、二〇〇六年）。

- (12) 「山本神右衛門重澄年譜」前掲『佐賀県近世史料』第八編第一卷。

- (13) 重澄の言葉を書き留めた「自徳集」前掲『佐賀県近世史料』第八編第二卷にも同様の内容が書かれている。

- (14) 葉隠研究会『葉隠の道しるべ』（葉隠研究会、二〇〇五年）。

- (15) (16) 池田史郎著作集刊行会編『佐賀藩研究論攷 池田史郎著作集』（出門堂、二〇〇八年）、前掲『葉隠の道しるべ』。

- (17) 前掲『佐賀藩研究論攷 池田史郎著作集』。

- (18) 古川哲史『葉隠の世界』（思文閣出版、一九九三年）。

- (19) (20) 前掲『佐賀県近世史料』第八編第一卷。

- (21) 「山本神右衛門常朝年譜」前掲『佐賀県近世史料』第八編第一卷。

- (22) 野口朋隆『葉隠』にみる家臣の『譜代』意識と御家の『家風』（『比較

社会文化研究』第一九号、二〇〇六年）は、譜代意識と家風を強調することで御家の一体感をより強固にしていたと述べている。

- (23) 古川哲史氏は「一生探促し」「一生成就せず」などの言葉に「不完全」「未完成」を指す不完全主義・未完成主義がみられるとしている。前掲『葉隠の世界』。

- (24) 深谷克己『深谷克己近世史論集』第二卷（校倉書房、二〇〇九年）。

〔付記〕 脱稿後、藤野保『佐賀藩』（吉川弘文館、二〇一〇年）が刊行された。佐賀藩政の推移については本書を参照されたい。